

窮死

国木田独歩

青空文庫

九段坂の最寄もよりにけちなめし屋がある。春の末の夕暮れに一人ひとりの男が大儀そうに敷居をまたげた。すでに三人の客がある。まだランプをつけないので薄暗い土間に居並ぶ人影もおぼろである。

先客の三人も今来た一人も、みな土方か立ちんぼうぐらいのごく下等な労働者である。よほど都合のいい日でないと白馬どぶろくもろくろくは飲めない仲間らしい。けれどもせんの三人は、いくらかよかったと見えて、思い思いに飲やっていた。

「文公ぶんこう、そうだ君の名は文さんとか言ったね。からだはどうだね。」と角かどばった顔の性質ひとのよさそうな四十を越した男がすみから声をかけた。

「ありがとう、どうせ長くはあるまい。」と今来た男は捨てばちに言つて、投げるように腰掛けに身をおろして、両手で額を押え、苦しい咳せきをした。年ごろは三十前後である。

「そう気を落とすものじゃアない、しつかりなさい」と、この店の亭主ていしゆが言つた。それぎりでたれもなんとも言わない、心うちでは「長くあるまい」と言うのに同意をしているのである。

「六銭しかない、これでなんでもいいから……」と言いきして、咳せきで、食わしてもらいたいという言葉が出ない。文公は頭の毛を両手でつかんでもがいている。

めめめ泣いている赤んぼを背負つたおかみさんは、ランプをつけながら、

「苦しそうだ、水をあげようか。」と振り向いた。文公は頭を横に振った。

「水よりかこのほうがいい、これなら元気がつく」と三人の一人の大男が言った。この男はこの店にはなじみでないと見えてさつきから口をきかなかつたのである。突き出したのが白馬どぶろくの杯さかずき。文公はまたも頭を横に振った。

「一本つけよう。やっぱりこれでないかと元気がつかない。代だいはいつでもいいから飲やつたほうがよかろう。」と亭主あるじは文公がなんとも返事せぬうちに白馬どぶろくを一本つけた。すると角かどばった顔の男が、「なアに文公が払えない時は、わしがどうにでもする。えッ、文公、だから一ツ飲やつてみな。」

それでも文公は頭を押えたまま黙っていると、まもなく白馬一本と野菜の煮つけを少しばかり載せた小ざら一つが文公の前に置かれた。この時やつと頭を上げて、

「親方どうも濟まない。」と弱い声で言つてまたも咳せきをしてホツとため息をついた。長おもてのやせこけた顔で、頭は五分刈りがそのまま伸びるだけ伸びて、ももくちやになつて少しのつやもなく、灰色がかつている。

文公のおかげで陰気がちになるのもしかたがない、しかしたれもそれを不平に思う者はないらしい。文公は続けざまに三四杯ひっかけた。またも頭を押えたが、人々の親切を思わぬでもなく、また深く思うでもない。まるで別の世界から言葉をかけられたよう

な気持ちもするし、うれしいけれど、それがそれまでの事である事を知っているから「どうせ長くはない」との感じを、しばしの間でもよいから忘れてくても忘れる事ができないのである。

からだにも心にも、ぽかんとしたような絶望的無我ぶがが霧のように重く、あらゆる光をさえぎって立ちこめている。

すき腹に飲んだので、まもなく酔いがまわり、やや元気づいて来た。顔を上げて我れ知らずにやりと笑った時は、四角の顔がすぐ、

「そら見ろ、気持ち直つたろう。飲れ飲れや、一本で足りなきやアもう一本飲れや、わしが引き受けるから。なんでも元気をつけるにやアこれに限るツて事よ！」と御自身のほうが大元気になつて

来たのである。

この時、外から二人の男が駆けこんで来た。いずれも土方ふうの者である。

「とうとう降^やつて来やアがった。」と叫んで思い思いに席を取った。文公の来る前から西の空がまっ黒に曇り、遠雷さえとどろきて、ただならぬけしきであつたのである。

「なに、すぐ晴^{あが}ります。だけど今時分の夕立なんて、よつぽど気まぐれだ。」と亭主^{あるじ}が言った。

二人が飛びこんでから急ににぎおうて来て、いつしか文公に気をつける者もなくなつた。外はどしや降りである。二つのランプの光は赤くかすかに、陰^{かげ}は暗くあまねくこのすすけた土間をこめ

て、荒くれ男のあから顔だけが右に左に動いている。

文公は恵まれた白馬どぶろく一本をちびちび飲み終わると飯を初めた、これも赤んぼをおぶった女主人かみさんの親切でたらふく食った。そして、出かけると急に亭主がこつちを向いて、

「まだ降ってるだろう、やんでから行きな。」

「たいしたことはあるまい。みなさん、どうもありがとう」と、穴だらけの外がいとう套を頭からかぶって外へ出た。もう晴あがりぎわの小降りである。ともかくも路地をたどって通りへ出た。亭主ていしゆは雨がやんでから行きなと言ったが、どこへ行く？ 文公は路地口の軒下に身を寄せて往来の上かみしも下を見た。幌人車ほろぐるまが威勢よく駆けている。店々のともし火が道に映っている。一二丁先の大通りを

電車が通る。さて文公はどこへ行く？

めし屋の連中も文公がどこへ行くか、もちろん知らないがしかしどこへ行こうと、それは問題でない。なぜなれば居残っている者のうちでも、今夜はどこへ泊まるかを決めていないものがある。この人々は大概、いわゆる居所不明、もしくは不定な連中であるから文公の今夜の行く先など気にしないのも無理はない。しかしあの容態では遠からずまいつてしまふだろうとは文公の去つたあとでのうわさであつた。

「かわいそうに。養育院へでもはいればいい。」と亭主あるじが言つた。

「ところがその養育院というやつは、めんどくさくつてなかなかはいられないという事だぜ。」と客の土方の一人が言う。

「それじゃア行き倒れだ！」と一人が言う。

「たれか引き取り手がないものかな。ぜんたい野郎はどここの者だ。」と一人が言う。

「自分でも知るまい。」

實際文公は自分がどこで生まれたのか全く知らない、親も兄弟もあるのかないのかすら知らない、文公という名も、たれ言うもなくひとりでできたのである。十二歳ごろの時、浮浪少年とのかどで、しばらく監獄に飼われていたが、いろいろの身のためになるお話を聞かされた後、門から追い出された。それから三十いくつになるまで種々な労働に身を任して、やはり以前の浮浪生活を続けて来たのである。この冬に肺を病んでから薬一滴飲むこと

すらできず、土方にせよ、立ちん坊にせよ、それを休めばすぐ食うことができないのであつた。

「もうだめだ」と、十日ぐらい前から文公は思つていた。それでもかせげるだけはかせがなければならぬ。それできようも朝五銭、午後ひるに六銭だけようやくかせいで、その六銭を今めし屋でつかつてしまった。五銭は昼めしになつてゐるから一文もんも残らない。

さて文公はどこへ行く？ ぼんやり軒下に立つて目の前のこの世のさまをじつと見てゐるうちに、

「ア、いつそ死んでしまいたいなア」と思つた。この時、悪寒おかんが身うちに行きわたつて、ぶるぶるツとふるえた、そして続けざまに苦しい咳せきをしてむせび入つた。

ふと思いついたのは、今から二月前に日本橋のある所で土方をした時知り合いになった弁公わかいのという若者がこの近所に住んでい
ることであつた。道悪みちわるを七八丁飯田町いいたまちの河岸かしのほうへ歩いて
暗い狭い路地をはいると突き当たりにブリキ葺ぶきの棟むねの低い家があ
る。もう雨戸が引きよせてある。

たどり着いて、それでも思い切つて、

「弁公、家うちか。」

「たれだい。」と内からすぐ返事がした。

「文公だ。」

戸があいて「なんの用だ。」

「一晩泊めてくれ。」と言われて弁公すぐ身を横によけて

「まあこれを見てくれ、どこへ寝られる？」

見ればなるほど三畳敷の一間ひとまに名ばかりの板の間と、上がり口にようやく下駄げたを脱ぐだけの土間とがあるばかり、その三畳敷に寝床が二つ敷いてあって、豆ランプが板の間の箱の上に載せてある。その薄い光で一ツの寝床に寝ている弁公おやしの親父の頭がおぼろに見える。

文公の黙っているのを見て、

「いつものばばアの宿へなんで行かねえ？」

「文もんなしだ。」

「三晩や四晩借りたつてなんだ。」

「ウンと借りができて、もう行けねえんだ。」と言いさま、咳せきを

して苦しい息を内に引くや、思わずホツと疲れ果てたため息をも
らした。

「からだもよくないようだな。」と、弁公初めて気がつく。

「すっかりだめになっちゃった。」

「そいつは気の毒だなア」と内と外でしばし無言でつつ立ってい
る。するとまだ寝つかれないでいた親父が頭をもたげて、

「弁公、泊めてやれ、二人寝るのも三人寝るのも同じことだ。」

「同じことは一つこつた。それじゃア足を洗うんだ。この磨滅ちびげ下
駄たを持って、その水道で洗って来な、」と弁公景氣よく言つて、
土間を探り、下駄を拾つて渡した。

そこで文公はやつと宿を得て、二人の足のすそに丸くなった。

親父おやじも弁公も昼間の激しい労働で熟睡したが文公は熱と咳せきとで終夜苦しめられ、明け方近くなつてやつと寝入つた。

短夜みじかよの明けやすく、四時半には弁公引き窓をあけて飯をたきはじめた。親父もまもなく起きて身じたくをする。

飯ができるや、まず弁公はその日の弁当、親父と自分との一度分をこしらえる。終わつて二人は朝飯を食いながら親父は低い声で、

「この若者わかいのはよつぽどからだを痛めているようだ。きようは一日そつとしておいて仕事を休ますほうがよかろう。」

弁公はほおばつて首を縦に二三度振る。

「そして出がけに、飯もたいてあるから勝手に食べて一日休めと

「言え。」

弁公はうなずいた、親父は一段声を潜めて、

「他人事ひとごとと思うな、おれなんぞもう死のうと思つた時、仲間の者

に助けられたなア一度や二度じやアない。助けてくれるのはいつも仲間のうちだ、てめえもこの若者わかいのは仲間だ、助けておけ。」

弁公は口をもごもごしながら親父の耳に口を寄せて、

「でも文公は長くないよ。」

親父は急に箸はしを立てて、にらみつけて、

「だから、なお助けるのだ。」

弁公はまたもすなおにうなずいた。出がけに文公を揺り起こし

て、

「オイちよつと起きねえ、これから、おいらは仕事に出るが、兄きは一日休むがいい。飯もたいてあるからナア、イイカ留守を頼んだよ。」

文公は不意に起こされたので、驚いて起き上がりかけたのを、公が止めたので、また寝て、その言うことを聞いてただうなずいた。

あまり当てにならない留守番だから、雨戸を引きよせて親子は出て行った。文公は留守居と言われたのですぐ起きていたいと思つたが、ころがつているのがつまり楽なので、十時ごろまで目だけさめて起き上がろうともしなかつたが、腹がへつたので、苦しいながら起き直つて、飯を食つてまたごろりとして、夢うつつで

正午近くなるとまた腹がへる。それでまた食つてごろついた。

弁公親子はある親分について市の埋め立て工事の土方をかせいでいたのである。弁公は堀ほりを埋める組、親父おやじは下水用の土管を埋めるための深いみぞを掘る組。それでこの日は親父はみぞを掘っている、午後三時ごろ、親父のはね上げた土が、おりしも通りかかった車くるまひき 夫のすねにぶつかった。この車くるまひき 夫は車も衣装みなりも立派で、乗せていた客も紳士であったが、いきなり人車くるまを止めて、「何をしやアがるんだ、」と言いさま、みぞの中の親父に土かたまりの塊を投げつけた。

「気をつけろ、間抜けめ」と言うのが捨てぜりふで、そのまま行こうとすると、親父は承知しない。

「この野郎！」と言いきま往来にはい上がって、今しもかじ棒を上げかけている車夫くるまひきに土を投げつけた。そして、

「土方だって人間だぞ、ばかにしやアがんな、」と叫んだ。

くるまひき

車夫は取つて返し、二人はつかみあいを初めたが、一方は血気の若者ゆえ、苦もなく親父おやじをみぞに突き落とした。落ちかけた時調子の取りようが悪かったので、棒が倒れるように深いみぞにころげこんだ。そのため後脳こうのうをひどく打ち肋骨ろっこつを折つて親父は悶絶もんぜつした。

見る間に付近に散在していた土方が集まって来て、車夫くるまひきはなぐられるだけなぐられ、その上交番に引きずって行かれた。

虫の息の親父は戸板に乗せられて、親方と仲間の土方二人と、

氣抜けのしたような弁公とに送られて家に帰った。それが五時五分である。文公はこの騒ぎにびつくりして、すみのほうへ小さくなつてしまった。まもなく近所の医者がかかる事は来た。診察の型だけして「もう脈がない。」と言つたきり、そこそこに行つてしまつた。

「弁公しつかりしな、おれがきつとかたきを取つてやるから。」と親方は言いながら、財布さいふから五十錢銀貨を三四枚取り出して「これで今夜は酒でも飲んで通夜つやをするのだ、あすは早くからおれも来て始末をしてやる。」

親方の行つたあとで今まで外に立っていた仲間の二人はともかく内へはいった。けれどもすわる所がない。この時弁公はいきな

り文公に、

「親父は車くるまひき夫の野郎とけんかをして殺されたのだ。これをやるから木賃きちんへ泊まってくれ。今夜は仲間と通夜つやをするのだから。」と、もらった銀貨一枚を出した。文公はそれを受け取って、

「それじゃ親父さんの顔を一度見せてくれ。」

「見ろ。」と言って、弁公はかぶせてあつたものをとつたが、この時はもう薄暗いので、はつきりしない。それでも文公はじつと見た。

飯田町の狭い路地から貧しい葬儀とむらひが出た日の翌日の朝の事である。新宿赤羽あかばね間の鉄道線路に一人の轢死者れきししやが見つかった。

轢死者は線路のそばに置かれたまま薦こもがかけてあるが、頭の一部と足の先だけは出ていた。手が一本ないようである。頭は血にまみれていた。六人の人がこのまわりをウロウロしている。高い土手の上に子守こもりの小娘が二人と職人しよくにんてい体の男が一人、無言で見物しているばかり、あたりには人影がない。前夜の雨がカラリとあがって、若草若葉の野は光り輝いている。

六人の一人は巡查、一人は医者、三人は人夫、そして中折れ帽をかぶって二子ふたこの羽織を着た男は村役場の者らしく、線路に沿うて二三間の所を歩きつもどりつしている。始終談笑しているのが

巡査と人夫で、医者はこめかみのへんを両手で押えてしゃがんで
いる。けだし棺おけの来るのを皆が待っているのである。

「二時の貨物車でひかれたのでしよう。」と人夫の一人が言った。

「その時はまだ降っていたかね？」と巡査が煙草たばこに火をつけなが
ら問うた。

「降っていましたとも。雨のあがったのは三時過ぎでした。」

「どうも病人らしい。ねえ大島さん。」と巡査は医者の方を向
いた、大島医師は巡査が煙草を吸っているのを見て、自分も煙草
を出して巡査から火を借りながら、

「無論病人です。」と言つて轢死者のほうをちよつと見た。する
と人夫が

「きのうそこの原をうろついていたのがこの野郎に違いありません。確かにこの外套がいとうを着た野郎です、ひよろひよろ歩いては木の陰に休んでいました。」

「そうするとなんだナ、やはり死ぬ気で来たことは来たが昼間は死ねないで夜やったのだナ。」と巡査は言いながら、くたびれて上り下り両線路の間にしやがんだ。

「やつこさん、あの雨にどしどし降られたので、どうにもこうにもやりきれなくなつて、そこの土手からころがり落ちて線路の上へぶつたおれたのでしよう。」と、人夫は見たように話す。

「なにしろ哀れむべきやつサ。」と巡査が言つて何心なく土手を見ると、見物人がふえて学生らしいのもまじっていた。

この時赤羽行きこもの汽車が朝日をまともに車窓に受けて威勢よく走つて来た。そして火夫も運転手も乗客も、みな身を乗り出していちもつ薦のかけてある一物を見た。

この一物は姓名も原籍も不明というので、例のとおり仮埋葬の処置を受けた。これが文公の最後であつた。

実に人夫が言つたとおり、文公はどうにもこうにもやりきれなくつて倒れたのである。(完)

青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六篇」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日 第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日 第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日 第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：鈴木厚司

2000年7月5日公開

2004年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

窮死

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>